

「教育改革」との対峙

相変わらず国の「教育改革」は続いている。今回は特に、学習指導要領の改訂のベースとなる教育内容の変更、高大接続、6・3制の見直しに関する事などがあり、教育改革が向かおうとしている先に、国の、企業戦士育成への焦りのようなものさえ感じさせる状況である。教育が何を目指し、どのような人間像を描くのかは、教育の根幹にかかわることとして、じっくり考えなければならぬことは言うまでもない。

学校が社会に対して労働力の育成と分配の機能を担っていることは紛れもない。このことは教育を受ける側から見れば、学習の達成の帰結が、個々のキャリアと強く結びつくとして理解していることと重なる。この意味では、社会活動や経済活動に関する次世代の人材育成が学校教育の責任であるといえる。こうなると、国がおこなう教育において、国が求める「人間像」が盛り込まれることは当然の成り行きなのかもしれない。しかし、ここで問題にしたいのは、その「人間像」が、どのような政治判断のもとに、どのくらいの「程度」をもって、教育の枠として埋め込まれているのかということである。こうした不安ともいえる疑問が、この間の一連の教育改革からは浮かび上がってくる。

道徳の教科化はもちろん、突然に浮上したプログラミング教育、授業時間枠を超えた小学校英語の教科化、その英語を総合の時間を振り替えてもよいという突然のお達し、高大接続では大学入試の試験を民間英語検定が肩代わりすることとなった……。これからの「企業戦士の育成課題」として重点化されるものをひたすらねじ込んでいるようにすら見える状況である。しかも、気を付けなければならないのは、こうした国が求める人間像を、今回の教育改革では「資質や能力」という言葉で、以前よりも具体化し、かつ評価できる方法を見つけたということである。

ここに懸念される大きな問題がある。一つは、本来人間が自由に追求すべき「幸福像」の矮小化である。このままでは、学校教育をしっかりと受ければ受けるほど、人々の幸せの在り方は一元化され、しかも一元化されることによって、幸せは狭き門となって競争は自然に激化する。未来に向けた資質・能力（と国が提示するもの）を身に着けた者のみが幸福を手に入れられるのだという、まるでゲームを思わせるかのような単一のストーリーが教育の世界に織り込まれているのだ。ここにおいて、多様な幸福像は、唾棄されるべきものとなる。

また、もう一つの別の問題は、全体の利益が個の利益につながるという、単純な錯覚が底流に埋め込まれていることだ。全体の利益＝個の利益といえないことは、格差の拡大を背景に私たちにもわかり始めている。いったい誰にとって「都合のいい」幸せなのか。冷静に見極める必要があるようだ。

「教育」という営みには、過去から現在までの時間を伝えつつ、現在から未来を創造する営みであり、言葉を換えれば継承と発展の力を子どもたちにつけていく取り組みという側面がある。学制が敷かれる以前、教育は地域での営みであった。若者組などに代表される制度のもとに、地域社会に一人前の大人として生活できるすべをそこでは教え込んだ。正しく継承し、生まれた場所で生きることが幸せの基盤として考えられていた。しかし、明治の時代になって学

校ができる、教育は地域から取り上げられ「国の事業」となった。そこでは富国強兵に代表される「国策」に沿った人材育成が目的となった。それこそ国の「未来」を託すべく、国家百年の計となったのである。

そして戦後、社会の主人公は国から国民一人一人になった（はずである）。そこでは一人ひとりの幸福追求の手立てとして、教育は再生した（はずであった）。戦後の民主教育がどこまで進み、どれだけの花を開いたのかは、これからの歴史だけが証明するのかもしれない。

しかしながら、国の教育改革の動きを見てみると、そこにはどうしても、再び、一つの方向に引きずり込まれ、その大きな潮流に子どもたちが流され始めているような、そして、その「装置」として、学校が働き始めているような気がしてならない。

こう考えてくると、今、私たちが教育の中でせめて大切にしなければならないのは、客観的な批判力と想像力なのだと思う。渦に巻き込まれつつも、それを批判し、その外の世界を創造できることなのかもしれないと思う。

平和と、平等と、自由を希求する人間像こそが、教育が求めるべきものであるという当たり前のことが、何か理想論のようにしか聞こえない悲しい時代になりそうな予感の前に立って、そのような時代への突入を何とかくい止めたいと思うのである。

夏から秋のEd.ベンチャー学習会

◆外国にルーツをもつ子ども支援 ボランティア養成講座

8月9日(火)・10日(水) 連続講座 大和市文化創造拠点シリウス

外国にルーツをもつ子どもたちが抱える困難さに、私たちはどのくらい迫れているのだろうか？かれらの困難さに可能な限り接近した上で、そこから支援のあり方を検討してみたいと考えます。連続講座の中で、その手ごたえをもっといただけたらと思います。

◆特別支援教育のための学習会 スタディツア 8月21～22日

北海道浦河町にある、100名以上の精神障害者等をかかえた当事者が暮らす「べてるの家」。そこで繰り上げられる「当事者研究」を是非見学したいと考えました。合い言葉は、「自分でつけよう自分の病気」です。一緒に「べてるの家」に行きませんか？

◆スタディツア事前学習会 「子ども食堂」を見学しよう！

9月21日(木) 19:30～21:00 大和市文化創造拠点シリウス

秋に大和市内の子ども食堂を訪問します。その事前学習として、「子ども食堂」代表の方から、設立経緯や活動について聞きます。

◆理論学習会 女性に焦点を当てた「教育と貧困」学習会 第2弾！

10月2日(月)19:00～21:00 シリウス 講師 金子由美子先生(埼玉県元養護教諭)

思春期を生きる子どもたちの悩みに向き合いながら、からだ・こころ・性の学習に積極的に取り組み、現在子ども支援でも活躍中の金子先生にお話しいただきます。著者『思春期ってなんだろう』(岩波ジュニア新書)『自立クライシスー保健室からの思春期レポート』(岩波書店)等。

詳しくはホームページをご覧ください

【理事のつぶやき】 家族が病気になり、大変だったのはお金の管理だった。医療費が高額になると返金されたりもするのだが、その度に書類を持って役所に行く。保険額の相談のために担当の人と会う。あとで返済されるお金を一括で先に支払う。とても手間がかかる。手続きが面倒で、お金を無駄にしている人の気持ちもわかるし、その手続きの方法を知らずに過ごしている人も多いだろう。安心して家族のケアに集中することはできないものだろうか。(MR)